

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	少女小説模索期の永代美知代：『台湾愛国婦人』掲載作品を視座として
Author(s)	有元, 伸子
Citation	表現技術研究 , 15 : 1 - 10
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/49071
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049071
Right	
Relation	



少女小説模索期の永代美知代

―『台湾愛国婦人』掲載作品を視座として―

有元 伸子

岡田（永代）美知代（一八八五―一九六八）は、広島県甲奴郡上下村（現・府中市上下町）出身の女性作家・翻訳家である。田山花袋「蒲団」の横山芳子のモデルとして知られるが、相当数の小説や少女小説、童話類を発表し、ストウ夫人の「アンクル・トムズ・ケビン」の完訳としての日本初訳『奴隷トム』（一九二三年、成文堂）を刊行するなど、翻訳も手がけた。論者は、美知代の著作を調査し、著作権継承者の許可を得て、著作リスト（作品のPDF）、作家紹介、年譜、研究文献案内、リンクなどをホームページ上で公開している⁽¹⁾。

美知代については、早くから、花袋研究者によって花袋の周辺人物としての資料紹介や研究の蓄積があった。その後、作家としての美知代の研究も、特にジェンダーの視点を導入しつつ、進展している。論者も、美知代が花袋に先行して自身の恋愛を素材にして作品を発表しており、花袋はそれを参照して「蒲団」を発表したことなどを明らかにしてきた⁽²⁾。

ただし、近年の研究は、美知代の書いた一般小説やエッセイを対象とするものが多い。岡田美知代は、結婚後には永代美知代名で作品を発表し、長女出産後は少女小説や後には童話にも手を染めたが、児童

文学に関する検討までは手が回っていないのが現状である⁽³⁾。そうした研究状況のなか、最近、新たな雑誌に美知代作品が掲載されていることが分かった。「蜜に酔払つて熊になる」（『台湾愛国婦人』第四九号附録、一九二二年二月）である。これは、三ちゃんと美津子の姉弟によるいたずらを描く、子ども向けの短い作品である。

本稿では、初めに、美知代の一般小説から少女小説への移行期の様相を確認する。そのうえで、「蜜に酔払つて熊になる」を紹介しつつ、結婚・出産を経た女性作家が作品のジャンルを模索していく過程を追う。そうした作業によって、まことにささやかではあるが、一人の女性作家にとつての雑誌『台湾愛国婦人』の位置づけが見えてくることが期待したい。

一

まずは、結婚後に「永代美知代」名で作品を発表するようになった一九〇九（明治四二）年五月から、「蜜に酔払つて熊になる」を掲載

した一九二二（大正元）年一二月までの、美知代の年譜と執筆の状況を確認しておく。

《一九〇九年（明治四二年） 二四歳》

- ・一月、田山花袋の養女の形をとって、永代静雄と結婚
- ・三月、長女・千鶴子を出産。この頃、静雄は『中央新聞』に移籍

・一月、静雄と別れて、千鶴子連れて田山家に戻る。代々木初台で水野仙子と同居

《一九一〇年（明治四三年） 二五歳》

- ・一月、千鶴子を、花袋の妻・りさの兄・太田玉茗の養女に
- （二月、水野仙子、千鶴子とともに、仙子の故郷の福島に一ヶ月滞在）

（三月、太田玉茗が住職を務める埼玉県羽生の建福寺に一ヶ月滞在し、千鶴子を置く）

△三月、花袋が「縁」を連載開始（〜八月）

- ・四月、代々木初台の家を出奔し、静雄と復縁
- ・六月、『富山日報』記者となった静雄とともに、富山へ

《一九二一年（明治四四年） 二六歳》

- ・三月、長男・太刀男を出産
- ・五月、静雄は大阪の『帝国新聞』に入社
- ・六月、平塚らいてうから美知代に『青鞥』入社勧誘の書簡が発送されるが、居所不明で届かず
- ・六月、長女・千鶴子が死去

- ・七月、静雄とともに大分で静養
- ・一二月、上京

《一九二二年（明治四五／大正元）年 二七歳》

- ・静雄が『東京毎夕新聞』に入社
- ・一二月、静雄、『アリス物語』を刊行

結婚、破局、長女出産と養女に、復縁、富山への転居、長男出産、大阪への移動、長女の死、転地療養、上京……と、この三年半ほどは、美知代にとって相当に大きな生活上の変転がある期間であった。変化の激しい時期に、美知代はどのような執筆活動を行ったのだろうか。※以下、（ ）内は、発表の年・月。このうち年は、西暦（一九××年）の下二桁を示す。

〔一般小説〕

- ・「火事」『女子文壇』09・5
- ・「老嬢の告白」『中央新聞』09・6〜8（推定美知代作）
- ・「女子大学英文科出身 新夫人の打明話」『中央新聞』09・10〜11（推定美知代作）
- ・「ある女の手紙」『スバル』10・9
- ・「里子」『スバル』10・10
- ・「蟹江博士未亡人」『富山日報』10・11
- ・「一銭銅貨」『中央公論』10・12
- ・「岡澤の家」『ホト、ギス』10・12
- ・「清のぐるり」『ホト、ギス』11・4

〔少女小説／児童向け作品〕（雑誌別）

- ・『少女世界』……「まあちゃんの御看病」 09・7
- 「貰った妹」 11・2
- 「お年玉」 12・1
- 「花枝さんの雪鬼」 12・2
- 「姉様の指環」 12・4
- 「暗い叔母さん」 12・7
- 「帰校前」 12・9
- 「赤い柿」 12・11
- 「罰金ごっこ」 12・12
- ・『中央新聞』……「少女写生 休暇後」 09・9
- ・『少女』……「みそ萩」 09・10
- 「七つ紋附」 10・2
- 「おとぎばなし 雲雀のお祝ひ」 10・6
- 「少女小説 上京！」
- 「揺籃の丘」 12・4
- ・『富山日報』……「少女ぶんがく 萬壽子のお祖母さん」 10・8
- 「9
- 「少女小説 薄志弱行」 10・9
- ・『少女界』……「少女小説 お形見」 11・2
- 「かりうど」 11・？（※作品の現物を未確認）
- 「少女小説 五重のお菱」 12・3
- ・『少女の友』……「苦の後」 11・3

・『家庭パック』……「虫干」 12・9

「でべちゃんと赤ん坊」 12・12

美知代が精力的に執筆していることが窺える⁽⁴⁾。一般小説のうち、「新夫人の打明話」「ある女の手紙」「里子」「岡澤の家」は、花袋の「縁」に客体として描かれた出来事を、当事者の視点からとらえ返しており、花袋研究の面からも着目される作品群である⁽⁵⁾。「里子」も、早熟な少女と周囲の大人たちとの眼差し眼差される関係を描いていて、力のこもった作品である。

これらの佳作に比べて、「清のぐるり」は、情報や人物関係が十分に整理されておらず、中途半端な印象を受ける。執筆時は長男・太刀男の妊娠中の臨月近くで、身体的にかなり厳しい状況だったのではないかと。そして、そのためだろうか、美知代は、「清のぐるり」以後は「小説 洪水の後」（『婦人評論』13・3）で再開するまでほぼ二年間、一般小説の筆をとることはなく、少女小説に専念することになる。子どもが二歳になって、ようやく一般小説に復帰するのであり、その後は、少女小説を書くかたわら、『婦人評論』『新小説』『新潮』『女の世界』『希望』『婦女新聞』などに継続的に一般小説を発表し、さらに大正半ばからは翻訳や読み物などの著書へと軸足を移していく。

一方、少女小説は、長男出産後も転居の時期などを除き、コンスタントに発表されている。家事・育児を担わざるをえない女性作家にとって、若年層向けの短篇作品は、細切れの時間でも書くことが可能な便利なジャンルであったのだろう。

この時期に書かれた少女小説の題材や主人公の年齢はさまざま

ある。年少の主人公が看病のためにお祖母さんの腰をもんだり（「まあちゃんの御看病」）、養女の妹ができて喜んだり（「貰った妹」）、姉と一緒にハート型の紋付きを誂えることを夢見たり（「七つ紋附」）、姉が学校に戻るのを寂しがったり（「帰校前」）、いつも読書をしている叔母さんを思ったり（「暗い叔母さん」）、といった家族関係を描く作品が多い。父の死によって女学校に行くことがかなわぬ主人公の話（「みそ萩」）、病気の級友を見舞うも亡くなってしまふ話（「苦の後」）などの少女不幸物語もある。上京できる喜びを高らかに友人宛ての手紙に記す「少女小説 上京!」、同じく上京を前にした少女の心境を描く「揺籃の丘」、家出をして上京するも墮落女学生と間違われて悔やむ「少女小説 薄志弱行」など、少女の上京をめぐる物語も、美知代の描く少女小説の型の一つである。

いずれにせよ、当然ながら、少女小説の主人公は少女であり、少年も大人の男性もほとんど登場することはなく、少女は家族の女性や学校の女友達との間で成長していく。育児などの制約もあつてか一般小説の執筆が途絶えた期間に、美知代はジェンダー化された少女小説を書き続けていたのである。

二

続いて、「蜜に酔払つて熊になる」の紹介と検討に移りたい⁽⁶⁾。

美知代の作品が『台湾愛国婦人』に掲載されるに至った経緯は不明である。前項で確認したように、美知代は、一九〇九年から『少女世

界』に少女小説を多数掲載し、一九一〇年には『スバル』にも二作を執筆した。したがって、これらの雑誌に關係する沼田笠峰、与謝野寛、与謝野晶子などか、あるいは、水野仙子、尾島菊子、国木田治子ら知人の女性作家か、いずれにせよ既に同誌に寄稿している作家の推輓によるものではないかと想像されるが、雑誌とのコネクションの委細は分からない⁽⁷⁾。

美知代の「蜜に酔払つて熊になる」は、誌面にして六頁弱の児童向け短篇読み物で、以下のように始まる。

《三ちゃんには本当の姉さんが、たつた一人ある 美津子と云つて、まるで三ちゃんを女にしたやうなお転婆だ、其上、一人娘だから。父様も母様も大事になさるし、自分でも中々威張つたものだ。》

お転婆と悪戯小僧の寄合だから、年中喧嘩をしてゐるのだが、その癖不思議と仲が好い、さすがに姉弟である。喧嘩をしても、すぐその傍からなほるのだ。》

三ちゃんと美津子の、『お転婆と悪戯小僧』の姉弟によるいたずらがこのあと展開される⁽⁸⁾。台所の板場二階に置かれた壺入りの蜂蜜を、こっそりと大量に食べたあげくに、蜜で酔つて、熊と猿になった真似をして、どたんばたんとふざけ合う。そこへ母様がやってきて、二人は部屋に連れ戻され菓を飲まれ寝かされてしまった、という荒唐である。

では、この作品にはどのような特質があるのだろうか。

第一に、美知代の子ども向け作品として、初めて男児が登場することである。前項でも触れたごとく、美知代は出産後に年少者向けの作品を書き始めるが、それらはすべて少女小説であり、主人公は少女であった。『少女世界』『少女』『少女界』『少女の友』といった少女雑誌だけではなく、『中央新聞』『富山日報』『家庭バック』といった新聞や一般誌においても、美知代の書く子ども向け作品は少女を主人公としていたのである⁽⁹⁾。

本作「蜜に酔払つて熊になる」では、三ちゃんと美津子の姉弟が登場する。蜂蜜を食べすぎて酔っぱらった二人は、三ちゃんが熊に、美津子が猿になる「ごっこ遊び」を始める。冒頭の登場順も、熊の付くタイトルからも、男児である三ちゃんに焦点化されている。ただし、三ちゃん一人が主人公であつて美津子は副次的な人物にすぎないのでは決してなく、姉弟は常に一緒に行動をしており、姉弟二人ともに主人公と見なすべきだろう。

本作以前の美知代の少女小説においては、年齢は異なれどいずれも少女が主人公であつた。そして、少女と女友達、姉、母、叔母、祖母といった女性たちとの関係が描かれる、女性ジェンダー化したストーリー展開であつた。

ところが、「蜜に酔払つて熊になる」では、『お転婆と悪戯小僧』の姉弟を主人公とすることによって、それまでの美知代の少女小説では描き得なかつた、『お転婆』で男児と対等に悪戯をする少女を描くことが可能になつたのである。本作の姉弟は、あたかも主の留守に競い合つて砂糖を食べ尽くしてしまう太郎冠者と次郎冠者の二人のようであり（狂言「附子」）、悪戯する男児を止める分別のある女兒、

といったステレオタイプな性別役割分業で描かれることはない。

かつて論者は、美知代の少女小説に描かれた〈労働〉表象を検討したことがある⁽¹⁰⁾。同時代の主流の少女小説においては、立身出世を目指す少年と差異化し、少女には良妻賢母イデオロギーを反映して、他者から愛される娘であることを求めていた。ところが、美知代の少女小説においては、女性であつても条件に恵まれれば男性と同じように成功できるという、少女たちをエンカレッジするメッセージを発していることを指摘した。こうした労働・職業観を示す少女小説は、いずれも本作以降に描かれている。また、少女の自立を促し、男女の差異の薄い世界を描く点では、後年の、少女飛行家が誘拐された少女たちを救い出すエンターテインメント系少女小説（「冒険奇談 少女島」『少女世界』17・11（18・3））も思い起こさせる。

第二に、本作には、熊や猿になるという、子どもの「ごっこ遊び」が描かれていることである。蜂蜜を、家人に見つからないようにこっそりと、しかし競争しながら盛大に食べすぎた二人は眠くなる。

《『あゝ、僕もう蜂の蜜なんか。見るのも嫌になつちやつたよ。美津姉さん、あのね、熊は蜜が大好きなんだねえ、どつさり喰べて、しまひに酔払ふんだつて』

『さう、あゝ姉さんもなんだかクラ／＼して来た 酔払つたのかしら』

『酔払つた／＼面白い／＼』

『おもしろい／＼』

『おゝい助けて呉れ、熊になりさうだ、姉さん、熊にならう』

『嫌だわ熊なんか姉さんは、姉さんはお猿になつてよ』

『うん、ぢや姉さんがお猿で、僕が熊で、熊が酔払つて、山からミツシリ、ミツシリ、板場の二階へ出て参りました、ミツ、ミツ、ミツ、ミツ姉さん！』』

大人に管理されない子どもだけの時間と空間のなかで、子どもたちは自発的に「ごっこ遊び」を繰り広げる。自分とは違う生き物に「なる喜び」⁽¹¹⁾、ワクワクするような奇妙なスリルがそこにはある。哲学者のケンダル・ウォルトンは、『ごっこ遊びは、想像的な活動の一種である』とし、『ごっこ遊びに携わることは、実生活でいつの日か引き受けることになる役割を練習する機会を提供する』重要な機会であると述べる⁽¹²⁾。蜂蜜を食べることを通じて、二人の姉弟は動物になり、日常生活を離れた無秩序な世界を想像し創造するのである。

その際に、かわいらしい熊⁽¹³⁾、蜂蜜を好む熊、という西洋風のイメージが借用されていることにも注目したい⁽¹⁴⁾。蜂蜜の好きな熊として、今日ではA・A・ミルンの「くまのプーさん」(一九二四年)が想起されるが、それ以前にも熊と蜂蜜は関連づけられている。ルーシー・M・ロング『ハチミツの歴史』には、『クマは昔からハチミツと結びつけられてきた』として一六〇〇年代のクマがハチミツをとろうとしてハチに襲われるエッチングや古いロシアの漫画などが紹介されている⁽¹⁵⁾。

第三に、蜜に酔払つて熊や猿になる姉弟のじゃれあいが、ほのかに性を想起させるほど濃厚なことである。

《三ちゃん、だしぬけに美津子に飛びついて、ペロリと頬つぺたに嘗めついた。

『三三三、三ちゃんの三熊さん！』

美津子もヒヨロ／＼しながら、三ちゃんの頬に嘗めつくと三ちゃん、真赤な顔を変な格好に歪めて、ウオーと唸りながら、

『大変おいしいミツで御座います』

と節をつけて、またペロリと美津子の頬を嘗める。

『喰べられない程お喰べなさい』

美津子も節をつけて歌つたが、余り蜜に酔払つて、苦しいので、其処へベツタリ坐つて了つた。三ちゃんの三熊は、一人だん／＼元気になつて、美津子のぐるりをウオー／＼爬ひ廻りながら、ペロリ、ペロリ、美津子の頬つぺたを嘗めては、唸り唸つてはまた飛びついて来て頬を嘗める。

『あゝうるさい三熊だこと！』

美津子は本当に苦しいので、フウ／＼云ひながら、それを避けてゐたが、とう／＼我慢がしきれなくなつた。

『キヤアー、キヤお猿だ／＼』

いきなり三ちゃんの顔を引掻き初めた、三ちゃんは余計おもしろがつて、

『ウオー、ウオ、熊だよ熊々、酔払ひの熊だよ』

と嘗めつきにゆく。』

このあと二人は、『どたん、ばたん、どたん、ばたん』と、『板場の二階中を、逃げたり追つたり、駆け廻る』。

三ちゃんは、美津子のことを、《何だい、美津姉さんの蜂のみつ！》
《みつ、みつ、みつ、みつ姉さん》と呼んでおり、美津子の名前は、
蜂蜜とかけられている。《『大変おいしいみつで御座います』／と節
をつけて、またペロリと美津子の頬を嘗める》のであり、美津子の頬
を蜂蜜であるかのように見立てて、すでに大量の蜂蜜を食べ尽くした
ベタベタした舌で相手の頬を嘗めるのだ。

蜂蜜には、愛情や官能のイメージが存する。養蜂研究家の渡辺孝は、
ハネムーン（蜜月）の語の起源は、新婚夫婦が結婚後一カ月間はハチ
ミツで作った蜜酒を飲むゲルマン民族の風習から来ており、また、ハ
チミツには《回春効果》があると考えられていたという⁽¹⁶⁾。ルーシ
ー・M・ロングも、ハチミツは《甘さと愛情の象徴》であるとともに
《情欲的な意味》も含まれ、《「ハチミツ」という言葉は愛情のこも
った呼びかけによく使われる》と、その文化イメージを説明する。

美知代は、一般小説の「侮辱」において、女性同士の関係のなかに
田山花袋の自らへの管理的な愛情を風刺的に描き⁽¹⁷⁾、新聞小説「老
嬢の告白」においても女性同士の関係をエンターテインメント小説の
なかに描きこむなど⁽¹⁸⁾、性的な要素を潜ませて描くことが巧みな作
家であった。美知代の少女小説は『中央新聞』『富山日報』などの新
聞の文芸欄にも掲載されたことから知られるように、子どもばかり
ではなく、一般読者をも対象とした読み物としても書かれている。台
湾在住の若い女性読者に向けて、姉弟の子ども同士の熊と猿になっ
てじゃれあっている「ごっこ遊び」としての接触を描いたのではないだ
ろうか⁽¹⁹⁾。

もちろん、大人のいない子どもだけの限定された時空間で繰り広げ

られる「ごっこ遊び」は、必ず終わりを迎える。どたんばたんと騒ぐ
二人に気づいた母親は、《『あなた方は蜂蜜を喰べましたね、それで
酔払って熊だの猿だの、畜生になったのでせう、そんな事をするとき
に人面獣身と云つて、本当に尻尾が出来ますよ』》、《サア／＼尻尾
の生えないうちに早くお悪戯をやめて、お部屋へ帰りませう》と引き
離す。

《二人は母様に手を引いて頂いて、辛とのもことでヒヨロ／＼し
ながら、お部屋へ帰ると、何かお菓を飲まされてそれから、お床
をとつて寝かされて了つた。（をはり）》

母親の登場によって、子どもたちの自由で狂騒的なごっこ遊びの世
界は終わる。その想像的な体験は眠りの中で意識の底に沈められ、ウ
オルトンの言うように《実生活でいつの日か引き受ける》時を待つこ
とになるであろう。

* * *

結婚・出産を機に、一般小説と平行して少女小説を手がけるようにな
り、さらにおそらくは家事・育児の制約によって子ども向けの作品
を主に書かざるをえなくなった時期に、「蜜に酔払って熊になる」は
発表された。『台湾愛国婦人』という新しい媒体に、美知代は、それ
まで書いていた女性ジェンダー化された少女小説とは異なった、姉弟

の二人が男と女という差異なく「いつこの劇」を展開する作品を提供し、後年の少女の自己実現を後押しする美知代の少女小説へと進化する転機となったように思える。明治期の筋の面白い昔話的な「お伽話」とも、大正期の来るべき「赤い鳥」の童心主義的な「童話」とも異なつた、エンターテインメントの要素も含みつつ、少年少女の性にジェンダー化されない読み物を模索するのには、『台湾愛国婦人』というメディアの力が借りられたのであった。

注

- (1) 「広島的女性作家・岡田（永代）美知代」
<https://home.hiroshima-u.ac.jp/okadani-chiyo/index.html>
- (2) 「〈作者〉をめぐる攻防―田山花袋「蒲団」と岡田美知代の小説」（『日本近代文学』八八、二〇一三年五月）
- (3) 美知代の少女小説に関する論考に、相澤芳亮「女性作家・岡田（永代）美知代論―小説『英文のお手紙』の一考察」（『立正大学大学院日本語・日本文学研究』一三、二〇一三年二月）、有元伸子「永代美知代の少女小説にみる〈労働〉」（『内海文化研究紀要』四二、二〇一四年三月）など。
- (4) ここに掲載した小説作品以外にも、夫・静雄が勤務した『富山日報』には、「島崎藤村夫人を思ふ」（10・8）、「楠緒子女史を追想す」（10・11）といった追悼文のほか、内容的に美知代が執筆した可能性のある無署名の記事も散見された。
- (5) 光石亜由美「自然主義の女―永代美知代「ある女の手紙」をめぐるつて」（『自然主義文学とセクシュアリティ―田山花袋と（性欲）に感傷する時代』世織書房、二〇一七年）、井原あや「モデルの手記と小説―岡田（永代）美知代」（『「私」から考える文学史 私小説という視座』勉誠出版、二〇一八年）、有元伸子「推定・永代美知代作「新夫人の打明話」の描く結婚生活―〈別れる事情〉と花袋「縁」」（『花袋研究学会々誌』三三、二〇一六年六月）
- (6) 『台湾愛国婦人』第四九号附録（26・12）のラインナップは以下のとおり。
 - ・「両陛下下桃山御陵御参拝」
 - ・坪谷水哉「桃山御陵参拝記」
 - ・国木田治子「小説 約束」
 - ・媛二樓「天上の旅行」（カッセル版のお伽話の翻訳）
 - ・永代美知代「蜜に酔払つて熊になる」
 - ・横山栲々子「小説 夢見」
- (7) 与謝野寛が水野仙子を推薦した直後に、仙子の「お蝶」（第三八巻）が掲載されたことを、上田正行が指摘している（「『台湾愛国婦人』という雑誌の意義」『『台湾愛国婦人』の研究 本文翻刻篇』國學院大学、二〇一四年）。このような形で、美知代の推薦もあったのかもしれない。
- ・3）（春の増刊 第四卷第四号）の創作欄は、美知代以外に、与謝野晶子、木内錠子、野上彌生子、小野美智子、山田邦子、水野仙子、尾島菊子と、錚々たるメンバーがタイトルに《少女

小説』の角書付きの作品を発表している。

- (8) 《三ちゃん》の名は、おそらく美知代の弟・三米さんべいから取られている。《美津子》は、《蜂のみつ》を示すとともに美知代自身の名も含まれていよう。美知代は、最初の少女小説「まあちやんの御看病」以来、《まあちやん》《萬壽代》《萬壽子》など、主人公の少女には妹の萬壽代の名前を頻用している。また、三米は外国客船の船員となるが、美知代の「英文のお手紙」(『少女画報』一九一三年四月)では、女学校一年生の《萬壽代》のもとにサンチャゴにいる兄(《三ちゃん》)の知人の米国人少女から英文の手紙が届く設定となっており、自身の弟妹を登場させている。

- (9) 例外は、「おとぎばなし 雲雀のお祝い」(『少女』10・6)で、雲雀夫婦の客たちへのもてなしが描かれている。

- (10) 注3の拙稿

- (11) 発達心理学者の河崎道夫は、子どもが《ごっこ遊びで生き物になる》ことについて、《なんらかの形でそれらの生き物に憧れて、姿や行動をまねしながら「なる喜び」を味わう》とし、《ごっこでは子どもは気分的には「違う自分になる」》のであり、《そのいわば拡張された自我(たいていは自分よりは強い憧れの対象)が心と身体を動かして、子どもはその気になつてはりきる。普段以上の注意力、集中力、身体能力を発揮する。それで、結果的に現実の自分をちよつぱり成長させたりする》と述べる(『ごっこ遊び 自然・自我・保育実践』「第2章 「飼育活動」と遊び」ひとなる書房、二〇一五年)。

- (12) 『フィクションとは何か ごっこ遊びと芸術』「第1章 表象体とごっこ遊び」田村均訳、名古屋大学出版会、二〇一六年
- (13) ドイツのシュタイフ社がぬいぐるみのデディ・ベアを発売して世界的な大人気を博したのは、一九〇三年であった。

- (14) 赤羽正春「ものと人間の文化史 熊」(「第三部 文芸にみられる熊」法政大学出版局、二〇〇八年)が挙げている日本の語り物や昔話などの熊のイメージ(金太郎、山の神、宮沢賢治や棕鳩十の作品世界)と、「蜜に酔払つて熊になる」のそれとは明確に異なっている。

- (15) 大山晶訳、原書房、二〇一七年。

さらに、ごっこ遊びで熊になって、美津子から《三熊さん》と呼ばれる《三ちゃん》のネーミングは、イギリス民話やトルストイ創作の童話「三びきの熊」にも由来するだろう。美知代は、後年、「家庭童話 三熊さん」(『新家庭』19・6)という父・母・子の三匹の熊が登場する童話を発表している。

- (16) 『ハチミツの百科 新装版』I-1 ハネムーンの起源「IX-4 ハチミツとセックス」(真珠書院、二〇〇三年)

- (17) 有元伸子「〈擬装〉による恭順と抵抗―田山花袋「蒲団」後の岡田美知代の小説」(『国文学攷』二二八・二二九合併、二〇一六年三月)

- (18) 有元伸子「〈資料紹介〉『中央新聞』掲載の推定・永代美知代作品「老嬢の告白」―付 岡田(永代)美知代著作リスト」(『内海文化研究紀要』四一、二〇一三年三月)

- (19) 高山実佐は、《『台湾愛国婦人』購読者の多くは中産階級以上

の婦人』で、『その多くが高等女学校卒業者』であると考えられると述べている（「女性のあり方はいかに語られたか―『台湾愛国婦人』の婦人論から」『『台湾愛国婦人』の研究 本文篇・研究篇』國學院大学、二〇一五年）。

付記

本研究はJSPS科研費(17K02452)助成による成果の一部である。「蜜に酔払つて熊になる」所収の『台湾愛国婦人』第四九号付録のデータは下岡友加氏より提供いただいた。本稿執筆にあたり、「日本近現代文学解読研究B」（広島大学文学研究科、二〇一九年度後期）の受講者とのディスカッションから種々の示唆を受けた。記して感謝申し上げる。

（ありもと のぶこ、広島大学大学院文学研究科教授）